

編纂処の解散・再開と第2版の編集

今泉潤太郎 『中日大辞典』前編集委員長

インタビューア

安部 悟 (愛知大学現代中国学部助教授)

■出版の反響と編纂処の解散

安部 今お話にありましたように、『中日大辞典』は、一九六八年二月に正式に出版されるわけですが、出版までに日中両国の実にはさまざまな多くの人々の協力や援助があったことを、私を含め新しく辞典の編纂に携わるようになった者は、決して忘れてはいけないと思います。また、今泉先生が何度も指摘されておられるように、辞典の刊行に本間先生の斬新な発想と優れた経営手腕が不可欠であったということもよくわかりました。こうして出版された『中日大辞典』ですが、初刷りは一万冊、人々の期待もあって、なかなか好評だったようですが、当時の反響と、『中日大辞典』が出版されたことによつて、一応当初の目標は達成されたわけで、その後中日大辞典編纂処はどうなったのか、その後の経緯についてお伺いしたいのですが。

今泉 辞典は幸い好評で、もう亡くなられた橋本萬太郎氏が、執筆された三省堂『言語学大辞典』の中国語の項の中で、日本で唯一この『中日大辞典』が取り上げられ評価されています。要するに紙とはさみと糊で切り貼りしただけのものではないということですね。事実そういう辞書まがいのものもあるわけですが、そういうものではないということが世間で評価されたと思っています。

こうして評価も定まったのですが、編集を始めてからとにかく十何年もたち、私個人としてもやはり疲れましたね。実際、鈴木先生はその後大病にかかり、もつとショックなことには内山先生がその数年後お亡くなりになられるのです。これは辞書を一冊作る目が潰れたり死んだりするといわれるように、やはり大変な苦勞なのです。他方、大学の方も財政上は不要な支出が減る方がいいわけですから、辞典編纂について今後どうするかという抜本的な検討が我々三名に委ねられた格好になりました。

具体的に言いますと、辞典編纂処には自前の事務室もありましたし、図書資料等が一万余千点ありました。それ以外にも、什器備品の類や万余のガラ刷り、二〇万枚の辞書カードとカードボックス等の物品も相当あり、これを維持管理するのにどうするかという問題があるわけです。また校正がいかに大切かということが後々わかるのですが、年を追って何万冊と出版されるわけで、何万人の方がこれを利用されるわけですね。そ

うしますと、四校まで校正したとはいうものの、やはり誤植がたくさん出てくるのです。これにどう対応するかという問題もあつたわけですが、我々三人が集つて話し合いをした結果、完成してほつとしていたためか、その後の見直しをあまり考えず、解散しようということになつてしまつたのです。六九年くらいでしょうか。辞典編纂処がなくなつて、じゃあ何が残つたかという、辞典刊行会が残つたのです。組織上は辞典刊行会を残して、辞典編纂にかかわる資料等は、三人の研究室に置いておくことになりました。この当時、それぞれに研究室が与えられていたので、まずそこに保管しておき、次の増刷時にはまた集つて、どうしたらいいか検討しようということになりました。図書は大図図書館に寄贈し、什器備品もそれぞれの部署にもらつてもらいました。辞典編纂を事業として継続する場合、一旦編纂処を解散することがいかに致命的かということに、後になつて気付かされることになります。

というのは、六八年の完成後、中国側に寄贈するという形で二、三〇〇〇冊をそれぞれ買い上げていただいた方々の名前で送りましたので、是非中国側の反応も知りたいということと、中国との交流を愛知大学としても行いたいということで、郭沫若氏に訪中をお願いしたのですが、これが一九七一年のことです。中国は六六年に文化大革命が始まりましたが、こちらの方としては文化大革命なんていうことは予想せずに作つて、原稿は一九六四年くらいで収集が終わつていました。印刷には一五ヶ月かかりましたから、刊行の一五ヶ月前には原稿が基本的には完成してははずです。ところが一九六六年頃から、文化大革命関係のものがぼつぼつ出始め、その後、新しい語彙がどんどん出てくる。そして売り出した途端に文化大革命でしょう。これをなんとかしたいという欲求が出てきて、訪中したいという申請を出したのですけれど、とてもそんな時期ではないということ、実現は日中の国交が回復された翌年の一九七三年になつてしまいました。

それで訪中がいよいよ実現するわけです。愛知大学の名前で訪中した代表团としては、この辞典編纂のために行った学術代表团が最初です。一九五五年に馮乃超氏が来られ、それから約二〇年後に愛知大学側がそれに応えて行つたことになります。代表团は鈴木先生が団長で、私も団員の一人として参加しましたが、内山先生は参加されませんでした。

我々は南開大学、北京大学、復旦大学の三大学で学術交流をしました。南開大学がホスト校となり二日間に渡つて学術交流を行いました。南開大学の言語、文学、歴史、哲学などの教授が座談会に参加してください、『中日大辞典』についてそれぞれ具体的に何頁の何はどうかという具合に逐一指摘していただきました。これほどの見落としがあるのかと大変ショックでした。一つは先ほど言ったように六五年の末には収集を打ち切つていますから、文化大革命に関する語彙はその都度追加という形で入れていったのであり、そのため体系的に入らなかつたということもあります。

さらに言えば、文化大革命についてはいろいろな見方がありますけれど、日本で受け

入れられたのがどちらかという中国側に好意的な理解だったのでしよう。例えば、“五七幹校”は、我々の辞典でもそうですが、強制収容所という解釈ではなかったですよ。やはり幹部再教育の施設という解釈です。そういう面もなかったわけではないですけどね。こういった実態についても見聞を深めることになりました。

■編纂処の再開と改訂作業

今泉 中国へ行って、いろいろなことを直に目にし、また辞典の簡体字はまだ不完全で、残りの何千字というのは簡化字ではないわけですから、これもちゃんとしたいという思いがあつて、帰国後再び三人で集つたのですが、その時鈴木先生から増訂版をやることと、中日大辞典編纂処を再開したいという提案がされたのです。一旦解消したものをもう一回構築するというこの大変さを私は当時十分にはわかつていなかったのですが、結果的に内山先生は参加を断られました。内山先生は翌年亡くなられますから、お体の調子が悪かつたということもあつたのでしょう。鈴木先生は、自分一人でもやる覚悟であり、その頃病気で手術されたこともあつて、専任教員を退職してやるとおっしゃいました。そうなるが残っているのは私だけです。私も、じゃあやりましょうということになつて、初版時の内山先生の役割、つまりマネージャー的な役割を担うことになりました。こうして『中日大辞典』の増訂版の編纂が始まります。

増訂版は初版の手直しという形で始まりました。しかし、この間に文化大革命が終わり、その後八〇年代、九〇年代になると改革開放ということで、今度は資本主義——市場経済の社会に変わりますよね。そうなりますと語彙も当然のことながら変わってきますし、何よりもさまざまな言語面での政策が進み、辞書編纂においてもどうしても取り入れなければいけないような事柄が多々でてきます。そういうことで増訂版をどうしても作らざるを得ないような状況も客観的にみてもありました。もう一つ財政的なことでもあります。華日辞典刊行会はずっと継続されています。そこから提出される収支表を見ると、だんだん黒字になつていくわけですね。結果的には大学の付属事業として唯一、税金を納める、つまり利益が出てしまつていく程度の収支になるわけです。七二年以降、日中の全面国交回復を期に、交流が全面的に広がるという背景のもと、中国語の学習人口が増え、また光生館や岩波書店などから中日辞典あるいは日中辞典が出てくる状況でした。これらが要因となつて、どうしても増訂版を出さなければという気運が高まつてくるわけです。

中国でも『現代漢語詞典』という權威性をもつ国語辞典が出版されます。正式に出版されるのは文化大革命が終わつてからなのですが、試印本、試用本という、正式に出版される以前の版が日本では公然と市販されていて入手できましたので、これとの比較対照ができました。これをベースにしたさまざまな資料も出てきました。中国国内の状況の大きな変化とも関係があります。

それから『中日大辞典』の初版との比較で言いますと、すでにこの頃は「中ソ一辺倒」から「中ソ論争」になって、四、五〇年代製だったソ連式の機器は第一線から退き、新しく日本やアメリカの機械や新しいテクノロジーを反映したものがどんどん入ってきます。そういう点で、初版に取り入れた新語が古色蒼然とした感じにどうしても見えるのです。そのようなことで、増訂版の編集は客観的に見ても、また我々の側から見ても、どうしてもその必要があったのだと思います。

鈴木先生が編集主任でしたが、お体のこともあり週に二、三日程度の出勤でした。その他のメンバーは私が編集委員長、辞典編纂のために後にお願ひしました中国人の黄異先生。それから内山先生が亡くなられたあと、陶山信男先生がみえました。その他、現在おられる荒川清秀先生や転出された森博達先生など、中国語の先生方全員に編集委員になっていただきました。安部先生にも編集委員をお願いするのですが、それは増訂版が完成してからのことでした。また、この時は編集協力委員を作りませんでした。というのは中国で『中国大百科全書』などさまざまな権威ある資料が出てきまして、これを活用すれば十分足りる状況になったからです。編集委員が新語を入れ、誤りを正し、古いものを取るというような形で進めました。結果的に一九八六年二月に完成します。これも一三年か一四年の編集時期を要したわけですので、初版の一三年とほぼ同じ年月がかかったことになりました。

■増訂版と増訂第二版の出版

安部 初版の完成後、一度は解散した辞典編纂所が、一九七三年の訪中を契機として多少の紆余曲折を経て、一九七五年に再び開設され、そこから増訂版の出版へ向けて本格的に動き出した。鈴木先生が退職され、編集の主任を務められ、今泉先生が編集委員長という、新しい体制ができたわけですね。増訂版の完成までには、初版の時とほぼ同じ時間がかかったわけですが、完成までの道のりは決して平坦なものではなく、その間またいくつかの困難を乗り越えることになりました。その中の最大のものはおそらく、今泉先生が「増訂に際して」の中でも書かれておられるように、増訂版の出版に情熱を傾けておられた鈴木先生が、まさに「青天の霹靂」で、八二年に急逝されたことだろうと思います。その後は今泉先生を中心に編集作業を進め、八六年に完成したわけですが、増訂版の特徴やその評価についてお聞かせ下さい。

今泉 この増訂版は、致命的というのではないのですけれど、ある意味では非常に無様なことをやりました。増訂版には簡化字総表に載る簡化字を全て入れました。印刷通用漢字字形表というのが中国で出ていて、この七〇〇〇字近くを全部取り込んで作りました。日本の辞書の中で唯一中国の漢字に関する決定を完全に反映したものだという自負があったのですが、実は増訂版が出来上がった翌年にわずかな数ですが、簡化漢字の追加が出たのです。わずか七字ですが、初版のほぼ倍の頁数にあたる二五〇〇頁中のどこ

かに入っているこの七字を百パーセント正確に捕捉することはできません。その後さらに五三個の漢字の発音も訂正されたので、合計六〇字です。六〇個の漢字の字形をすべて網羅して修正したいと、増訂版の増刷の時に見積りをとったら、通常の印刷費用よりかなり高くなることがわかりました。改版すれば完璧なので、これを評議会にお願いしたのですが、手続き上の瑕疵を指摘されまして、一年待たがかりました。結局、翌年改訂版が出されるわけですが、大学にも大変迷惑をかけました。これらの訂正を加えましたので、増訂版は一刷だけで終わり、翌年六〇字を取り入れた増訂第二版を出版し、現在に至っているわけです。

これも非常に売れ行きが良かったです。これは初版の成果の上に立ったということ、出版社を今度は大手の大修館書店にしたことが大きかったと思います。大修館書店は『大漢和辞典』を出したところですよ。大手出版社ですから全国の書店の店頭に中日大辞典がならび、初版出版時に大学当局から期待されながら実現できなかった、愛知大学の知名度を全国的にするということを実現できたわけです。この増訂第二版は、初版の性格をそのままにしたので、全体の語彙数は相当数増えましたし、新しい語彙も三万語ほど増やしたので、その点では充実したものになったと思います。ただ、初版では新中国の収集を予定していたのですが、あまり実現できませんでした。それからもう一つ、古い語彙をカットせざるを得ず、その点においては比較的古いところをやっておられる方々からは、初版の特徴の一つがなくなっただけで不満が出たりしました。また、中国語学習者が飛躍的に増えたので、学習者向けの辞書をといて期待もあって、そういった点も盛り込んだこともあり、結果的にかなり分量が増えました。逆に言うと、両者の折衷で特徴がやや曖昧になったという点もないわけではないと思います。

しかし、この増訂第二版は、初版に劣らぬ売れ行きでした。一方で、中国語学習者や中国語を必要とする人たちの層がさらに飛躍的に伸びましたので、そういった需要に百パーセント応えるわけにはいかないと状況もあります。文化大革命が終わわり、八、九〇年代以降中国はあらゆる点で大きく変わっていますよね。近代国家になったというのは変ですけど。例えば、今度の新型肺炎などでもこれに関連したウイルスなど、要するに近代科学の用語を、今中国では日本などと同時並行的に取り入れていますよね。そういう事例が急速に増えたので、テクノロジー関係などの語彙については、今の増訂第二版は不足していると思いますね。現在、売上げが当初の半分ぐらいに減っていることも、その一つの反映であろうと思います。もちろんこの間、多種多様な中日辞典や日中辞典が出版されたことの影響もあると思います。

いずれにしても、そのような状況下で、平成一四年一〇月に中日大辞典編纂所を豊橋校舎から名古屋校舎に移転し、第三版の編纂が開始しました。これは愛知大学が八年前に中国関係の特化と名古屋校舎への集中化ということで現代中国学部を設立し、それを背景に辞典編纂所も名古屋校舎に移転したものです。こうして、新しい体制のもとに第

三版の編集が始まったということになると思います。

(二〇〇三年六月二日)

〔注〕『中国21』Vol.18 (二〇〇四年三月二〇日) 所載『中日大辞典と私』より抜
粋。